別室を皆で心地よい居場所にして主体的な取組に生かす

不登校生徒の状況

対象生徒は、入学時には通常どおり登校できていたが、徐々に欠席が目立ち登校を拒むようになる。２年次にＳＣとのカウンセリングを保護者と共に行い、別室登校を始める。別室登校になってから、時間はまちまちではあるが、コンスタントに登校できるようになった。

具体的な取組

○１人１台端末の活用

支援員は、オンライン授業の参加の補助、接続確認、ワークシートの印刷を行う。当該生徒が授業参加する際は教科担当との連絡を行う。

○活動ファイル

生徒１人につきＡ４ファイルを１冊活用し、毎日担任がチェックを行う。全体支援の日報を作成し、不登担当教員に回覧して支援の様子が分かるようにしている。必要があればその都度、活動ファイルを基に不登校担当教員が学年教員と支援内容を検討する。

○週１の話合い

週１日別室を利用する生徒同士で、一週間の課題等を基に、より良い学校生活や心地よい居場所にするためにどうするべきかを話し合う。その話合いを踏まえて、別室の机の配置や、日々の活動の記録（ワークシート）の様式などを改善していく。

○支援体制の充実

常時２人の支援員がいる。積極的に肯定的な声かけを行い、安心して関われる環境をつくっている。支援員のファイルは、支援について情報提供や連絡などを行っている。

成果

別室の開室及び支援員の温かな見守りにより、不登校傾向の生徒が安心して学校に登校できている。利用生徒が心地よいと思える環境を生徒自身が考え作っていくことで、より良い居場所づくりにしている。

課題

安心して通える学校・学級の居場所づくりを組織的に推進していくこと。

個に応じた支援を組織的に行うこと。

自分で決める！校内別室の取組

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校１年生の途中から友達との関わりをきっかけに体調不良などで登校を渋るようになった。校内別室の開室以来、週３日程度登校できるようになった。校内別室は、支援員や利用生徒との交流を通して安心して登校でき、居場所の確保にもつながっている。

具体的な取組

○一人１台端末の活用

オンライン授業に参加する際は、補助及び接続確認、話合い活動の相手となる。また、当該生徒が授業参加する際は、必要に応じて同行する。

○活動ファイル

生徒１人につき A4 ファイル１冊を活用、毎回支援員と担任からのコメントを記入し、活動の励みとなるようにしている。支援員は担任へ極力口頭で報告をする。また、別室の日報を作成し、生活指導主任や管理職に回覧して支援の様子が分かるようにしている。

○ＳＣ・支援員とのワーク

生徒が選んだカードゲームで、雑談しながら心をほぐす。SC とのカウンセリングも実施している。その他、卓球などの軽運動も実施している。

○支援体制の充実

現在、５人の支援員がいる。語学、音楽、スポーツと支援員の強みを活動に取り入れている。積極的に肯定的な声かけを行い、安心して関われる環境をつくっている。支援員がクラウドを使って、支援について情報提供や連絡など行っている。

成果

校内別室の開室及び支援員の温かな見守りにより、不登校傾向の生徒が安心して学校に登校できることができている。利用生徒ごとに対応を工夫して見守りを実施し、安心安全な居場所づくりに貢献している。

課題

支援員の資質向上と計画的な研修、教員との緊密な連携とともに、増加する利用者を受け入れる体制を実現する必要がある。

本校の校内別室指導における取組について

不登校生徒の状況

別室利用者は、要因は様々であるが、不安傾向にある生徒がとても多い。対象生徒は、中学入学時には、通常どおり登校していたが、１年生の秋頃から欠席が増えた。当該生徒と保護者は、登校したい気持ちが強かったが、胃腸の病気による体調不良を心配して欠席していた。学級での集団生活も難しい。

具体的な取組

○校内別室の利用・SC との面談

病気による不安とつらさで欠席が多かったが、別室利用により、体調面に配慮して、周りの目を気にすることなくトイレに行くことができるようにした。また、週１回、ＳＣによるカウンセリングを実施し、当該生徒の状況の確認をして、安心につなげている。

○個別学習の時間の設定

一人１台端末を活用したオンライン授業、教科担任が出す課題、生徒持参の課題、読書などに取り組めるようにした。ある程度の見通しをもって学級へ復帰できるのか、登校することが目標であるのかにより、声かけや対応を変えている。

○柔軟な対応

利用時間や学習内容は、当該生徒と担任が相談して決めている。教室で出席確認後、別室に移動する、午前中のみ利用、１日２時間のみの利用など、できる範囲で無理のない利用にしている。

○学級との関わりの維持

給食は、別室で食べる場合は自分で取りに行ったり学級の生徒が持ってきたりしている。様子を見ながら学年集会や定期考査、朝学活など参加できる場面を増やしていった。運動会は別室から見学することができた。

成果

中学校１年生のときは１日も登校できない月もあったが、校内別室支援開始後の２年生５月からは、別室を中心に登校し、出席できる日が増えた。支援開始後の３か月後には朝の学活や学年集会にも参加することができるようになった。

課題

３年生になり、月の半分の日数を出席することができている。定期的なＳＣ面談等、当該生徒の不安に寄り添った支援をしていく。

別室では、「自分のペースで進めて良いんだよ」

不登校児童の状況

対象児童は、他の児童との人間関係に悩み、６月頃から登校することができなくなった。夏休み明けから少しずつ登校できるようになった。登校後は、担任と一日の予定を確認し、教室での学習が難しい場合は別室で学習を進めている。

具体的な取組

○朝の日常的な習慣

登校後、教室に行き朝の準備を行う。一日の予定を当該児童、担任、別室指導支援員と確認する。別室で行うリモート学習の内容を決める。

このように活動を習慣化することで、安心感を得られるようにしている。

○自分のペースで学習する

教室で取り組めなかった学習について、別室にて当該児童のペースに合わせて学習を進める。一対一で対応するため、自分のペースで学習を進めることができ、成果が見られている。

○「がんばり表」で達成感を養う

「がんばり表」を作成し、放課後に振り返りを行う。よくできたら金色のシールを、友達と一緒にできたら半分のシールを貼るなどして、達成感を得られるようにしている。このことを別室指導支援員と担任とで情報共有し、当該児童の頑張りを双方で賞賛することで、学習意欲を高められるようにしている。

○魔法の言葉がけ

できたことや頑張ったことをたくさん褒めるようにしている。また、気分が落ち込んでいるときには、「今は心を休めていいんだよ。」と安心できるように言葉をかけ、待つようにする。成功体験を重ね、「やればできる。」と自己肯定感を高めるような言葉をかけるようにしている。

成果

支援員がそばにいることで、分からなくなったらすぐに聞くことができ、学習を積み重ねることができた。担任と支援員が情報共有をすることで、成功体験の蓄積ができ、笑顔で登校できる日が増えた。

課題

別室の学習でも気分が落ち込んでいるときは、課題に取り組めないため、気分転換の方法を工夫することが課題である。

校内別室指導支援員の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、10 月から不登校である。家庭内の環境の変化がきっかけと考えられる。登校しなければと思うが、教室に入るのが怖いと思っている。支援体制を強化したことで、校内別室が対象生徒の居場所になってきている。校内別室は、週４日開室しており、継続的に登校できるようになった。

具体的な取組

○校内体制

不登校担当教員は各学年から１人、支援員は大学生人名が行っている。

利用方法は、利用したい生徒とその保護者に説明し、体験する。その後、担任、不登校担当教員、支援員と面談を行い、希望日時、何をしたいか、同じ時間帯に他の生徒も利用することなどを確認し、許可を得る。

○教科の学習

教科書やワークを持参し、教室に近い環境で学習をしている。分からないところや不安なところがあるときは、支援員が質問に答えたり、アドバイスをしたりすることもある。当該生徒のペースで学習を進めている。

○給食

給食は、当該生徒自身が教室から別室指導で利用している視聴覚室まで運んでいる。給食を教室まで取りに行くことで、教室に入る機会ができる。食事中は、支援員や別室登校している他の生徒と学年を超えて会話をしている。

○コミュニケーション

週１回、ゲームをする日を設定し、トランプなどのカードゲームを通して、別室登校している他の生徒との交流を深めている。トランプでは、オリジナルでルールを考えて取り組んでいる。ゲームに取り組むことで、協力して関わり合うことができている。

成果

今年度は支援体制を強化し、取組を安定的に実施する環境が整い、当該生徒にとって居場所となっている。教科の学習、給食、ゲームなどを通して、コミュニケーションを深めることで、充実した学校生活を過ごすことができている。

課題

・別室指導を継続して行っていくこと。
・支援員を継続して確保していくこと。

校内別室指導支援について
～不登校の児童と保護者を孤立させないために～

不登校児童の状況

対象児童は、小学校１年生の時に転入した。「場面緘黙」があるため、人前で言葉を用いて意思を表現することがない。学習に困難があり、ひらがな・カタカナに書けないものがあるほか、２ケタ以上の足し算に課題がある。

具体的な取組

○学校の中で過ごしやすい場所をつくる

学校に来たがらなかったため、安心して過ごせる場所の確保と、支援員が当該児童の気持ちに寄り添う環境づくりをした。

教室に入りづらい他の児童ともやり取りができる環境を整備している。

○担任とつなぐ　学級とつなぐ

担任は、一日１回、別室にいる当該児童に顔を見せるようにした。慣れるにつれて、当該児童が毎朝教室へ挨拶に行く、毎日２時間は教室に行き、授業に参加するようにしている。

生活科見学等、体験的な学習には必ず参加を促すようにしている。

○なるべく多くの人と関わる機会をつくる

言葉を話すことを強要せず、意思を表明することやお互いの思いを伝え合うことを大切にしている。

支援員だけでなく、他の教職員とのつながりを広げていけるような機会をつくる。

○スクールカウンセラーとつなぐ・チームで受け止める

担任・養護教諭・特別支援教室専門員・SC・管理職を含め、具体的な支援策を検討する。

成果

支援員が一緒なら毎日登校できるようになった。

少しずつ支援員の支援がなくても授業に参加できるようになり、体験学習等は一人で参加できるようになった。

うなずきやハイタッチ等、声は出さないが気持ちを表現できることが増えた。

課題

校内別室指導支援員との関わりだけでなく、担任や他の児童と関わりを広げていけるように工夫することが課題である。

校内別室と校内別室指導支援員を活用した取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校２年生であり、１年次から学級がうるさく感じる、仲の良い友達がいない、教室に入りづらいという状況が続いた。令和５年６月から校内別室指導員の配置が始まり、８月頃から別室登校を開始した。現在は別室登校をベースに、行事関係の授業や定期考査などは教室に入れることもある。

具体的な取組

○校内支援委員会によるアセスメント

毎週木曜日の時間割に定例の校内支援委員会を位置付けて開催している。教員以外にも、ＳＣやＳＳＷが出席し、要配慮生徒の情報共有を図りながら、様々な視点から支援の方向性や具体的な手だてを検討している。

○別室登校に関する校内ガイドライン

校内別室指導支援員の配置に先立ち、校内における別室登校のガイドラインを策定し、共通理解を図った上で支援を開始した。校内別室指導支援員の役割と、当該生徒の担任や学年教員との連携の取り方などをあらかじめ整理することで、組織的な対応を推進した。

○常時オンライン授業を配信

常にオンライン授業を配信し、別室でも教室と同じように授業を受けられる環境を整えている。また、当該生徒の状態や主体性を尊重して、担任と相談しながら、その日に取り組む課題を決めたり、確認したりするようにしている。

○切れ目のない適切な支援を目指して

勤務曜日が異なる２人の校内別室指導支援員が密に情報共有を図りながら、生徒にとって切れ目のない適切な支援を行えるように、「引継ぎノート」を作成・活用している。また、引継ぎノートを通して、全教員も支援の詳細や生徒の状況を、具体的に把握することができている。

成果

「教室に登校する」か「欠席」の２択しかなかったが、校内別室指導支援員が配置されたことによって、「別室登校」という選択肢ができ、登校できるようになった生徒が増加した。一日平均５人程度が利用しており、なくてはならない存在となっている。

課題

別室登校から完全に教室に戻った生徒はおらず、更なる支援が必要。また、支援員の確保が課題である。

不登校生徒の対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、集団生活が苦手で学校嫌い、仲の良い友達もなく、人付き合いが面倒であるという様子であった。やがて、「学校へ行くぐらいなら・・・」と家庭で発言するようになり、学校から足が遠のいていった。

具体的な取組

○学級担任等との面談を通して

担任や学年主任と当該生徒・保護者と三者面談を繰り返し、当該生徒の様子と気持ちを理解し、別室登校をすすめた。

本校では別室を３種類設けている。週５日、毎日どこかの別室で活動ができるように工夫している。

○別室①

放課後自習教室として、全校生徒を対象とした、図書室で静かに読書や自習を行う場である。

当該生徒も図書室で過ごすことがある。

○別室②

別室支援員が在室している時間には、各自の判断に任せた取組を行っている。自分で用意した教材に取り組んだり、支援員や生徒同士の交流を図ったりしている。当該生徒も居心地が良いと言っている。運動会では、保護者受付を手伝ったりした。

別室③

全校生徒を対象とした体験学習の場である。今年度は、「折り紙教室」を開催している。不登校の生徒にも参加を呼びかけている。

現在のところ当該生徒の参加はない。

成果

別室登校ができるようになり、そこを利用する生徒と支援員との交流もするようになった。秋の運動会では、支援員のもと、保護者の受付を手伝うなど、コミュニケーション力を高めている。

課題

少しずつ、教室復帰ができるようにすることが課題である。

校内別室における不登校生徒への支援について

不登校生徒の状況

本校の不登校生徒のうち、今年度校内別室を利用している生徒は７名である。対象生徒は、「なんとなく教室に行けない」「集団生活に対する不安」「精神的に不安定」などの理由で、教室に行くことはできないが、学校に登校して自分のペースで学習したいという意欲がある。

具体的な取組

○学習支援

個々の課題に応じて、自分のペースで勉強に取り組んでいる。受験に向けて、ワークに取り組んだり、英検の勉強をしたりしている。

自己決定をしながら課題に取り組み、支援員が個別に対応をしている。

○ＳＣとの面談

ＳＣと定期的な面談を通して自己表現できるようになり、心のリハビリを続けている。その他にも、教育支援センターや特別支援教室等と連携をしている生徒もいる。

多様な関わりを大切にしながら、進学に向けて目標をもって生活している。

○教室とのつながり

定期考査を教室で受ける等、自分のペースで教室とのつながりを保ちながら過ごしている。生徒によっては、移動教室参加に向けて事前学習に取り組んだり、給食を教室へ取りに行ったりしている。

○給食

給食を教室まで取りに行くことで、教室に入る機会ができる。食事中は、支援員や別室に通っている他の生徒と学年を超えて会話をしている。教室で給食当番の活動をしている生徒もいる。

成果

当該生徒は、少人数でコミュニケーションを取りながら自分のペースで学習を進めることで、登校や学習、進学に対し前向きに取り組むことができるようになった。行事や教室での授業への参加、部活動へ参加する姿も見られるようになった。

課題

自習に頼るところが大きく補充的な学習が難しい。教室確保が難しく、人数が増えたときのペースの確保が必要である。

校内別室指導支援員制度の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、学力に課題があり、学習の意欲低下から不登校になっている。２年生の５月から別室指導を利用し、生活リズムが確立し、安定した登校ができるようになってきている。

具体的な取組

○別室の概要

教室復帰や社会的自立に向けての期間、学ぶために利用することができる教室とする。一人一人の状態に応じたスケジュールによる別室登校により、生活リズムを確立することで、安定した登校を目指す。

○別室利用までの流れ

・ＳＣと三者面談を実施して、申請書を提出する。
・校内委員会で利用が適当か検討する。
・別室での活動内容、利用頻度を決める。
※月に１回以上ＳＣ面談を行い、教室復帰のタイミングや生徒の自立に向けて、利用方法の適宜見直しを図る。

○運営上の工夫

別室利用生徒の登下校時間や所在を確認できるホワイトボードを職員室の出入り口付近に設置した。利用する生徒は、登校時に今日の予定を別室指導支援員に伝え、支援員が記入する。

○環境整備のポイント

・登校時に通常の学級の生徒と会わないように、別室に入室できる動線にしている。
・希望者は、別室にて間仕切りの利用もできる。

成果

令和５年度の校内別室指導員の配置から不登校生徒及び専門的な相談機関等とつながっていない生徒が減少した。
（令和４年度 20 人→令和６年度６人）

課題

不登校対応を組織的に取り組む。専門的な相談機関等とつながっていない不登校生徒を０人にする。

長期休業日後に不登校が続いた児童の対応について

不登校児童の状況

対象児童は小学校中学年であり、低学年から不登校傾向がある。夏季休業日明け以降、体調不良等の理由で長期欠席が続く。登校する意志はあるが、朝起きると体調不良を訴え登校できない。両親は共働きで、登校支援の声かけはするが、当該児童を家庭へ残し出勤する日々が続き、当該児童はそのままゲームや動画視聴をして過ごす。

具体的な取組

○校内委員会の開催

校内委員会にて、不登校の状況、ケースの概要、支援の方針を検討、協議する。校内委員会での協議内容は、共有システムにより全教職員に共有する。校内委員会構成メンバーは、不登校対策担当教員、管理職、主幹教諭、生活指導主任、ＳＣ、ＳＳＷ、校内別室指導支援員である。

○校内別室指導支援員による精神的不安の軽減

校内別室及び在籍学級で、常に別室指導支援員がいることの精神的な安心感により、登校状況が安定してきた。ＳＣや管理職が校内別室指導支援員へ、より良い対応方法等について指導・助言を実施している。

○校内別室指導支援員、家庭と子供の支援員の併用活用

校内別室指導支援員として、都内大学の心理学専攻の大学院生を任用した。家庭と子供の支援員は、地域の民生委員である。登校支援を家庭と子供の支援員が担当し、登校してからは、校内別室指導支援員が、別室及び在籍学級にて支援及び見守りを実施した。

○ＳＣの活用

当該児童及び保護者は定期的に SC 面談を受けている。児童の状況、保護者の心理的な負担等も考慮し、ケースによっては、ＳＣから医療機関等を勧めた。その結果、当該児童及び保護者は医療機関を継続的に受診するようになった。

成果

校内別室指導支援員、家庭と子供の支援員の併用活用により、登校不安の状態、登校後の精神的な安定を保てることにより、自力での登校ができる状態まで改善することができた。児童の心理的負担軽減も考慮し、校内別室指導支援員はクラスの中で見守り、いつでも相談することのできる体制を取っている。

課題

今後も、校内別室指導支援員の継続配置により対応していくこと。

校内別室における取組について
～安心できる居場所づくり～

不登校児童の状況

対象児童は小学校６年生である。自分の気持ちを言葉で表現することに課題があり、自ら友達に働きかけることはほとんど見られない。学習の遅れから学校に不安を抱き、５年生の５月から不登校となる。

具体的な取組

○場所の確保

できるだけ玄関に近く、他の児童との接触が少ない空き教室をパーティションで区切り、校内別室として設置する。机はあえて個別にせず、会議用長机を組合せ、利用児童が一緒に学習できるようにする。

○いつでも利用できる

校内別室を利用するにあたり、曜日や時間を決めることなく、自分が来られる時刻に登校し、希望する時間まで別室指導教室にいて良いこととする。

例１）給食だけ食べに来て、下校する。

例２）３時間目に別室へ登校し、４時間目終了で下校する。

○自己決定する活動

漢字ドリル、計算ドリルなど、自分のしたい学習に取り組む。

意欲がもてないときは指導員とゲームをして過ごすこともある。

○集団での取組

みんなでゲームに取り組んだり、一緒に給食を食べたりすることで、社会性を育む。

成果

当該児童は、校内別室にはほぼ毎日登校できるようになった。また、初めはゲームのみの取組だったが、別室利用の児童が学習に取り組む様子から、当該児童も学習に取り組むようになった。校内別室で担任による社会の授業を受けられるようにもなった。現在は朝の会だけ学級に入ることができるようになり、大きな成果が見られた。

課題

卒業に向けて１時間でも学級で学習できるよう、支援方法を工夫することが課題である。

校内別室における指導について

不登校児童の状況

対象児童は小学校５年生である。環境に慣れないことへのストレス等で朝起きられないことや、体調不良が続き登校するのが難しくなっていたが、現在は、今年度から設置された校内別室を利用することで、登校することができている。

具体的な取組

○別室指導支援員とのコミュニケーション

別室指導をする上で支援員との関係を構築するために利用児童が自己紹介を行う機会を設けている。楽しい雰囲気でお互いの自己紹介ができるようにすることで、不安感なく支援員と会話ができるようにし、コミュニケーションを取ることに慣れるようにした。

○一人１台端末で教室の授業に参加

当該児童とクラスとのつながりが切れないように一人１台端末を使って授業に参加している。学校に登校できず自宅で授業を受けるときも活用している。

教室で行われる授業を別室で受けているため、雰囲気を知ることができ、教室復帰がスムーズになることも目的としている。

○受けられる授業には教室で参加

当該児童が参加できる、参加したい授業には、教室に行って参加している。別室指導支援員が当該児童の意思を尊重し、サポートしている。

当該児童が自身の興味・関心に合わせて自己決定できるように促している。

○別室指導でも授業時間を意識

授業の時間にはオンラインで参加し、教室で授業に参加している児童と同じようにメリハリを付けて活動できるよう取り組んでいる。

成果

当該児童は、４月から別室指導を行い、５月の運動発表会には係の仕事を意欲的に取り組んだ。また、学年行事にも参加できた。今までは保護者と下校していたが、７月からは一人で下校することも増えた。困ったことを伝えることができなかったが、別室指導などにより、伝えられるようになってきている。

課題

別室指導のルールを作るとともに、別室指導を行う児童一人一人に対するアセスメントを丁寧に行い、支援を充実させていくことが課題である。

本校の校内別室指導における取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、昨年度からの不登校である中学３年生。

不登校の原因として考えられるのは、朝起きるのが苦手で、欠席が続き学習の遅れがあり、授業についていけない。令和５年の９月から別室を利用しており、週２、３日程度登校ができるようになった。

具体的な取組

○個別学習の時間設定

生徒本人から数学が苦手と相談があったので、サイコロやカードゲーム、クイズを使い学習した。

数学への興味が少しずつ湧き、数学の計算問題に取り組むようになっている。当該生徒自らが自己決定をして、課題に取り組む時間を設定している。

○個人の要望に基づいた幅広い対応

生徒が体を動かすことが好きなので、体育館でバドミントンやバスケットボールを行っている。また、理科の実験も好きなので、スライム作りやコインを使って浮力の実験をしている。

○小集団活動

集団での活動に慣れるため、不登校生徒が複数で、同じ部屋で活動している。

活動内容については、生徒それぞれが活動することを決め、全員同じ内容をする際は、事前に一緒に行いたいことを聞き、校内別室指導支援員がまとめている。

○友人との関わり

不登校生徒複数人で、別室で給食を一緒に食べ、コミュニケーションを図っている。その中で、生徒それぞれの考え方や意見を交換したりしている。悩みがあって落ち込んでいたり、元気がなかったりしても、その時は、笑顔になって楽しんでいる。

成果

当該生徒は、支援前、ほとんど学校に登校できていなかったが、現在は週２、３日程度登校できるようになった。

次回の予定や、その日活動したい内容を主体的に考え、伝えるなど成長が見られる。

課題

学校に登校することができるようになってきたため、今後は学力の向上を図る必要がある。

校内別室指導支援員の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、入学時には通常どおり登校していたが、６月から欠席が目立つようになり、７月以降登校できなくなった。中学校２年生の時に担任、保護者と連絡を取り、放課後の部活動への参加を始め、続いて別室登校を始めた。別室登校を始めてからは、週２日定期的に登校できるようになった。

具体的な取組

○支援会議・連絡ファイル

隔週で教育相談・特別支援委員会を実施した。管理職・養護教諭・各学年代表教員・ＳＣ・特別支援教室専門員・学習支援員・校内別室指導支援員が参加する。生徒の情報交換をはじめ、今後の支援策について協議している。また、各担任とは、連絡ファイルを通して連携を取り合っている。

○心地よい居場所にする取組

別室指導支援員との会話を通して、信頼関係を構築する。対話を通して自分の存在感、自己有用感を感じさせるようにして、支援員に対する信頼感をもてるようにする。

○学びの場としての取組

「分からない」に個別に対応する。利用する生徒のペースで学習できるようにすることで自信を付け、安心して学習に取り組めるようにしている。他の生徒と共に学ぶ場面も設定し、他者から認められることで自己肯定感を高めている。

○キャリア教育への取組

支援員との会話を繰り返す中で、自分の得意なことや性格を改めて見つめ直し、将来の目標をもてるようにする。別室への登校で生活リズムを確立できるようにして、会話の中で社会と学習の関連を学び、高校進学の話にもつなげていく。また、面接練習を通して自分の考えなどを再確認させる。

成果

別室指導支援員との関わりを深める中で、学校への不安感も軽減し、別室登校を続けられるようになった。他者と関わることにも前向きになり、生徒同士の話合い、学び合いを楽しむことができるようになった。

課題

自己肯定感を高められる安心できる居場所づくりを組織的に推進していくこと。個に応じた支援を組織的に行うこと。

校内別室における指導について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校３年生であり、低学年の時、集団の中での学習がストレスになり不登校傾向が続いていた。校内別室指導が始まってからは、元気に登校することができている。学校行事などの参加はできていないが、校内別室では、当該児童の希望に合わせて無理のない範囲で学習活動を行っている。

具体的な取組

○活動時間

毎朝､保護者と一緒に 8:30 に登校し、12:15 まで活動する。

体力面などの理由から、午前の授業が終わると、保護者と一緒に下校している。給食はその日の体調によって、食べたり食べなかったりしており、当該児童が自己決定する。

○場所

伸び伸びと活動できるように、広い多目的室を利用し、常に担任と連携を取りながら、学習を行っている。

また、体育館が空いていれば、校内別室指導員と一緒に体を動かしている。

○個別指導

在籍学級と別室をオンラインでつないで、校内別室指導員と共にクラスの授業を受けている。

別室では、国語・算数・理科・社会の学習に取り組んでいる。

○担任・校内別室指導員以外の教員との関わり

音楽の授業には参加できないため、休み時間に音楽の教員から個別指導を受けている。

興味がある図工と英語の授業は、校内別室指導支援員と共に、図工室や教室で授業を受けている。

成果

小学校１年生や２年生のときは、欠席しがちであったが、支援が始まった３年生の４月からは、月平均 70%の出席率になった。

別室での学習により、学習保障が確保できるようになった。

課題

校内別室指導支援員の人材を確保すること、校内別室指導支援員と保護者、教員との連携体制を構築することが必要である。

校内別室における不登校生徒の対応について

不登校生徒の状況

担任が当該生徒や保護者に定期的に連絡を取っている。当該生徒は養護教諭、ＳＣと関わっている。当該生徒は、教育支援センターに登校したり、校内別室で意欲的に学習したり、放課後に担任と面談するために登校したりしている。

具体的な取組

○校内別室の体制

別室登校は、毎週水曜日・金曜日の10：30～12：30に対応している。校内別室指導支援員は、本校卒業生の大学生１人である。別室には、毎日２～４人の生徒が登校している。生徒は自分に合った時間に登校し、自分のタイミングで下校している。

○場所：図書室（１階）

本校は２～４階が各学年の教室である。そのため、教室から離れており、他の生徒と接触する可能性が低い１階図書室を、別室として活用している。

○活動内容

２時間の１時間は、生徒一人一人が自習（オンライン授業含）や読書に取り組んでいる。後半１時間は、別室に登校している生徒全員で、ボードゲームやカードゲームを行っている。学年が異なり、話すことが苦手な生徒もいるが、生徒同士の交流が深まっている。

○記録表の活用

支援員は支援対象者・支援内容を記入する。記録表を職員室に保管することで、教員はいつでも見ることができ、別室登校生徒の状況を確認している。

成果

不登校生徒の出現率は、令和５年度5.36%から令和６年度3.91%へ減少している。校内別室が不登校生徒の居場所となり、登校日数が増えた生徒がいる。また、別室登校や教育支援センターをきっかけに、教室に登校できるようになった生徒もいる。

課題

教員と校内別室指導支援員、ＳＣとの連携や情報共有の時間を確保する。

校内別室指導支援員配置校の取組について

不登校児童の状況

対象児童は小学校５年生の児童である。昨年度から体調不良を訴え、休みがちであった。友達とのトラブルはなく、集団で学習や活動をすることを好まない。一人で学習したり本を読んだりすることが落ち着く児童で、今年度から不登校となった。

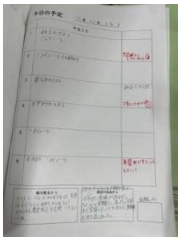
具体的な取組

○自分で意思決定する場の設定

登校した際には、どこで何をするのかを当該児童が意思決定し、予定を立ててから一日を過ごすようにしている。一日の終わりには振り返りを行い、できたことを褒めたり、うまくいかなくても大丈夫だと話したりして、前向きな気持ちで下校できるようにしている。

○教員間・保護者との連携

児童が決めたことを１日１枚の紙にして、毎回、別室指導支援員、不登校担当教員、担任が目を通して、情報共有をしている。週末には家に持ち帰り、保護者が確認できるようにしている。



○教育支援センターとの連携

不登校担当教員が教育支援センターに見学に行って、施設の環境を見たり、通所中の当該児童の様子を聞いたりして、当該児童に情報を共有し、児童理解を図っている。

○別室指導支援員による不登校の未然防止

別室指導支援員には、当該児童が教育支援センターに行っているときは、校内の巡回をして、クラスに入れない児童、集団活動が苦手な児童などと関わっている。不登校の未然防止につなげている。

成果

校内別室を設けることで、教室以外にも児童の居場所ができた。（現在４人程度）

集団行動が苦手な児童にとって、別室指導支援員の存在が安心感につながった。

課題

別室指導支援員の指導スキルを高めることが課題であり、様々な児童に合わせた支援を充実させる必要がある。

別室を利用する児童について

不登校児童の状況

対象児童は、集団の中で皆に合わせることを負担に感じて欠席が増え、一時不登校となった。ＳＳＷが保護者と連絡を取ったり、家庭訪問をしたりして登校を促した。遅刻することはあるが、以前よりも登校する日数が増えた。給食の配膳、片付け、グループ活動など、教室で過ごす時間もある。

具体的な取組

○学ぶ場所の自己決定

登校後、自分でその日の教科やタブレット端末に送られた学習内容を確認してから、教室と別室のどちらで取り組むのかを決める。その日の予定を担任に伝える時も支援員が付き添ってサポートしている。教室で使うワークシートなどは、事前に職員室にある別室利用児童の個別のＢＯＸに入れておく。

○図工

図工の授業など、作品を仕上げる場合は、教室でみんなと一緒に説明を聞いて教室か別室で活動に取り組んでいる。

欠席して作業が進んでいない場合は、事前に支援員に方法を伝えたり、道具を渡したりしておき、別室での活動が早く終わった時など、時間を見付けて支援員と一緒に活動を進めている。

○算数

算数の学習では、少人数の教室を選び、支援員に付き添ってもらい学習に取り組んでいる。別室を離れる場合は、別室にいる他の児童の対応もあるので、その日の状況によって付き添いが難しいこともある。

○オンライン授業

国語・社会・道徳の授業など、プリントや学習内容を自分で進めることが難しい時は、オンラインで一斉授業を受けている。教室にいる児童と一緒に説明を聞いて活動や学習に取り組んでいる。支援員は、オンラインでの学習の途中で活動内容を確認している。また、終わったプリントを自分で担任に渡しに行くようにサポートしている。

成果

教室ではなく、別室を利用することで登校することができるようになった児童が増えた。自分のペースで学習に取り組めるので、学習に取り組む時間も増えた。

課題

別室を利用する児童が増え、教室移動や専科の教室でサポートすると、人員が足りないことがある。

校内別室指導支援員配置校の取組について

不登校児童の状況

対象児童は小学校３年生であり、２年生の後半から学級になじめないことが理由で欠席が多くなった。３年生４月から担任や学級も変わり、渋りながらも登校をしていたが、５月から不登校となる。集団で学習や活動をすることを好まず、一人で学習したり本を読んだりすることが落ち着く様子である。

具体的な取組

○気持ちの切り替えの支援

登校できる時は玄関で児童を迎えて教室まで付き添う。苦手な教科の授業で気持ちが落ち込んだり、教室にいられなかったりした時は、別室や校庭等で体を動かしてから教室に戻すようにしている。

○自分で意思決定する場の設定

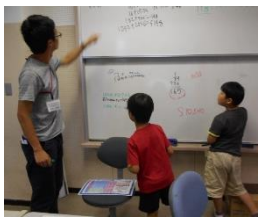
登校できた際には、どこで何をするのかを当該児童が意思決定できるようにして、予定を立ててから一日を過ごすようにする。一日の終わりには振り返りを行い、できたことを褒めたり、次の目標を決めたりしながら安心して登校できるように支援している。

○保護者や教育支援センターとの連携

登校できない時は、放課後に保護者と児童に来校してもらい、学習をしたり、話をしたりする機会を月２日程度は設けるようにしている。また、通所している教育支援センターとも情報共有を行い、共通認識をもちながら対応できるようにしている。

○別室指導支援員による不登校未然防止

別室指導支援員には、該当児童が登校していない時は、校内巡回をしてもらい、クラスに入れない児童や集団活動が苦手な児童等と関わり、不登校の未然防止につなげるようにしている。



成果

集団行動が苦手な児童や登校への不安が大きい児童にとって、別室指導支援員の存在が安心感につながった。

別室という場を設けることで、不登校傾向にある児童の居場所ができた。（現在５人程度）

課題

校内に別室があっても登校できない児童に対する支援を充実させることが課題である。

校内別室における指導について

不登校児童の状況

対象児童は、前年度秋頃から、毎朝保護者に付き添ってもらい、泣きながらも登校するようになった。なかなか保護者と離れられず、教室に入るまで時間を要していた。

今年度、校内別室ができてからは、毎日一人で登校できている。

具体的な取組

○個別学習～教室をパーティションで区切り、一人一人が学習に取り組める場づくり～

在籍学級の授業にオンラインで参加したり、担任が出した課題に取り組んだりする。その結果、集中して取り組む体験や、決められた活動をやり遂げる体験を積むことができている。

○グループ学習～テーブルやソファを置き、友達と関わり合うことのできる場づくり～

児童同士が相談して決めた活動や、カードゲーム・ボードゲーム等を通して別室を利用する児童同士で関わることで、コミュニケーションスキルやソーシャルスキルの向上を図る。

○在籍学級や担任とのつながり

教室に給食を取りに行く。帰りの会に参加する。参加できると相談して決めた授業は、参加する。担任は、少なくとも毎日１回は別室に行き、児童と話したり、課題を渡したりする。

このような取組を通して、児童が学校に居場所があることを実感できるようにしている。

○関係者間の情報共有、連携

管理職、担任、別室指導支援員、(必要に応じてＳＣ)で月１回連絡会をもち、情報共有や課題検討を行う。

別室利用開始時や個人面談期間に、保護者と担任、管理職が面談を行い、利用時の確認や今後の計画を立てる。

ＳＣを活用し、当該児童や保護者のカウンセリングを行う。

成果

毎朝、一人で登校することができるようになった。

別室で、友達と楽しく遊んだり、コミュニケーションを取ったりすることができるようになった。

困ったことがある時に、教員や支援員に言葉で援助要請ができるようになった。

課題

別室利用の児童が、授業に安心して参加することができるよう支援を充実させることが課題である。

校内別室指導支援について

不登校児童の状況

対象児童は、家庭の養育状況に困難さがあり、徐々に欠席が増え週１日程度の登校になっていた。また、友達との関わりがうまくいかないことも訴えていた。家庭の支援に入っている関係機関とケース会議を開いたり、保護者と連絡を取ったりしながら支援を続けていたが、校内別室ができたことで、数時間の利用から別室登校を始めた。

具体的な取組

○教室での学びにつなげる取組

担任が時間割の中からオンライン授業を受けられるものや教室で参加しやすい授業を知らせ、それを基に支援員と一日の予定を決めて、学習を進めている。ドリルなどは自分で学習する範囲を設定し、学習記録を作って担任に提出している。

○コミュニケーショントレーニング

パーティションで分けて個別で学習できる空間と、集団で活動できる空間を作っている。レクリエーションの時間を設定し、別室内の他の児童と小集団でのコミュニケーショントレーニングを行い、積極的にコミュニケーションを図れるようになっている。

○給食や行事への参加

学級の児童に別室まで給食を運んでもらえるよう協力をお願いしている。給食を持っていくときに自然に「ありがとう。」など友達との会話が生まれている。

体育の授業や行事などは、支援員に付き添ってもらいながら、学級の一員として参加できるようにしている。

○児童の得意なことが生かせる時間

学習だけでなく、児童の得意なことを生かせる時間を設定している。一人１台端末を使ってイラストを描いたり、工作をしたりして過ごしている。

作品は別室内に飾り、別室利用の児童とお互いに鑑賞し合うことで、良いところを認め合える環境づくりをしている。

成果

安心できる居場所があることで登校につながっている。また、他学年の児童とのつながりもでき、新たな人間関係の中でコミュニケーションを図ることができている。

支援員が別室を利用する児童を見守ることで、安定した運営をすることができている。

課題

学習に遅れがある児童への学習支援や集中が続かない児童への対応等、丁寧な個別指導を行うことが課題である。

校内別室の取組について

不登校児童の状況

対象児童の不登校の原因は、体調不良や気持ちの落ち込みで欠席が続き授業の進度に付いていけなくなったことや、友達との交友関係が築けないことなどにより、登校への意欲が低下したことである。今年度、校内別室を活用したことで、昨年度から大幅に欠席日数が減った。行事への参加もでき、少しずつ改善傾向にある。

具体的な取組

○児童が安心して過ごせるスペースの確保

現在は児童机を４席配置し、談話スペースを設けた。指導員が全体を見渡せるようにしている。また、部屋の隅には、心が落ち着かない場合に気持ちを落ち着かせるためのスペースを設置した。特性のある児童にはこのスペースの活用がとても有効である。

○情報の共有

児童ごとの指導日誌を作成し、担任に渡した上で副校長が情報を共有している。曜日によって指導員が異なるため、その指導日誌を確認することで、担当者間で共通理解を図り、児童に対応している。

○デジタル機器を活用した支援

全校朝会や集会をオンラインで実施する際は、校内別室からタブレット端末を使って朝会や集会に参加できるようにした。また、教室の様子や学習の内容をオンラインでつないで学級と関わりをもてるようにしている。

○個別対応による支援

校内別室に登校した児童には、担任と連携を図り、準備した課題や児童の実態に合った学習内容を提供している。必要に応じて個別で指導員が対応している。

成果

校内別室を利用している児童の欠席日数が大幅に減少した。不登校傾向の児童が学校に登校し、教室に戻るために別室を利用することができた。

また、不登校ではないが、朝に安定しない児童を一時的に滞在させて落ち着かせることで、教室に戻ることができ、不登校の未然防止につながっていると考えられる。

課題

別室登校はできるようになったが、教室復帰を希望する生徒に対して、教室に戻ることができる環境を整備することが課題である。

校内別室の取組について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校４年生であり、３年生での年間欠席日数が 38 日であった。４年生の５月からは、登校しなくなった。大きな声が聞こえると頭痛が起こるなど、ストレスが要因である。

具体的な取組

○校内別室での学習支援

校内別室を、安心して過ごせる場所として活用して、学習支援を行った。静かな場所で、線つなぎや塗り絵などのプリント学習に取り組むことで、学習に対する不安を取り除くようにした。また、パーティションで個別の空間を作り、イヤホンを使ってオンライン授業に参加することができるようにした。

○イヤーマフの活用

職員室前に自由に付けることのできるイヤーマフを設置した。校内の騒音が気になる児童が複数人活用し、安心して教室での授業に参加したり、校外学習に参加したりする様子が見られた。

○別室利用児童自ら一日の予定を設定

在籍学級の時間割を校内別室指導支援員と見ながら、自分で一日の予定を考える時間を設定した。自分で一日の予定を立てることができるので、学級担任や友達と教室で交流する時間を設定し、少しずつ教室での授業に参加できるようになった。

○ＩＣＴを活用した情報共有

別室指導を受けている児童の情報を校内別室指導支援員と共有できるよう、ＩＣＴ環境を整備した。担任などの児童に関わる教員が別室での様子を知ることで、児童の状態に合った対応ができるようになった。

成果

不登校対応加配教員の取組により、不登校の全児童のうち、全く登校することができなかった児童が少しずつ登校できるようになるなど、教職員とつながっていない児童がゼロになった。また、オンラインで別室と教室をつなぐことで、別室利用の児童が担任や友達と交流しやすくなった。

課題

新規の不登校を生まないための工夫や関係機関との連携の仕方については課題であり、よりよい方法を模索していく必要がある。

生徒が選ぶ特色ある別室の支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、７月から不登校である。友達との関係が悪くなったことがきっかけである。登校しても、なかなか教室に入ることができず、教科によっては教室に入ろうと決めるが、継続することができなかった。校内別室があることにより、継続して登校ができるようになった。現在、給食の時間だけ教室に入ることができるようになった。

具体的な取組

○教科の勉強

タブレット端末を用いて、リモート授業に参加する。また、教科書やワークを持参し、計画的に自習をする。自習していて分からないことへは、元英語科教員の支援員がアドバイスをしている。校内別室にいる生徒同士で、英単語や漢字クイズをすることもある。

○ゲームを通してのコミュニケーション

特別支援教室の教具を借りて、四目並べやカードゲーム等に取り組んでいる。　勉強の合間の息抜きだけはなく、校内別室にいる生徒とのコミュニケーションを深めるために役立っている。水曜日は、大学院生の支援員が別室対応しており、積極的なコミュニケーションが見られる。

○お話タイム

初めは支援員との１対１の話であったが、今は学年を超えて校内別室の生徒同士が話すことも多い。金曜日の支援は、元栄養士が担当している。食事や健康の話をし、生活習慣改善に役立てている。火曜日は大学生の支援員が担当し、スポーツの話等で盛り上がることもある。

○仲間との運動や読書

校内別室の授業で生徒が楽しみにしているのが体育である。まず皆で協力して体育館が空いている時間を探すところから始める。体育館が空かない日は、ボウリングのピンやバスケのゴールを手作りで設置して体を動かすこともある。図書室に行く時間も設定しており、１時間集中して読む姿が見られる。

成果

自分で時間割を決めて、充実した一日を過ごしている。また、ゲームや運動等を通して、コミュニケーション能力も高めている。

課題

別室での生徒同士のコミュニケーションが豊かになり、互いに高め合う活動を継続していく。

校内別室指導支援員の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校１年生の後半から集団や友だちとの関わりに困難を感じ、体調不良を理由に登校を渋るようになった。２年生に進級後、不登校となった。体調が安定しているときに別室登校で学習を勧めた。現在、徐々に登校できる日数が増えてきている。また、不登校対応巡回教員との交流を通して他者と関わることへの不安も低減してきている。進路を見据えて教育支援センターにも通所をしている。

具体的な取組

○組織

生活指導部会を中心に、校内別室指導支援員の運用方法や別室使用ルールを協議し、全職員と共通理解を行っている。また、当該生徒とつながりのある教職員と校内別室指導支援員が連携に重点を置き、別室登校生徒の指導を行っている。

○別室

図書室を別室登校の場としている。利点として、職員室から近いため全教職員が別室登校の生徒の様子を把握できることや、声かけしやすい環境である。近くに教員がいるので安心して生活ができる環境にもなっている。

○教室復帰向けた支援

生徒支援委員会での検討・情報共有、居場所づくり（学校生活を安心して過ごせる環境整備、行事に参加を促す声かけ）、絆づくり（クラス生徒との交流の場の設定）

○支援体制

現在、７人の校内別室指導支援員が在籍している。１日に２、３人体制で支援をしている。生徒対応には教員と共通理解が欠かせないことから、教員との打合せや、校内別室指導支援員が記入する報告書の回覧等を通じて、全教職員の情報共有を図っている。

成果

集団の場に不安をもつ生徒が、別室登校で支援員と交流を重ねる経験により、他者との信頼関係が再構築されている。その結果、登校することへの不安低減になり、登校日数が増えた。

課題

暫定的に図書室を利用している。別室指導専用の部屋の確保と、支援員の資質の向上ための研修が必要と考える。